

## 亡命ロシア知識人ジョルジュ・ギュルヴィッチの 現代フランス社会学・人類学への貢献\*

吉野 浩司\*\*、阿毛 香絵\*\*\*

Georges Gurvitch as a Russian émigré intellectual: His contributions on the Modern  
French Sociology and the Political Anthropology

Koji YOSHINO\*\*, Kae AMO\*\*\*

### はじめに

ある日とつぜん、自分が生まれ育った国家を追われることがある。それまでの政治権力とは全く違う別種の権力により国家が掌握されたり、国家そのものの境界線性が変更され、隣国の領土になったりすることは、そう珍しいことではない。強国の植民地となることもあれば、植民地から独立して建国することもある。そうした変動の絶えない国家というものの支配下に置かれた人々の、少なくともその一部は、強制的に、あるいは自らの意志に反して国を出ていかざるをえない状況となることもある。一般には、財力や才能やネットワークなど、移動に際しての何らかの力を有している場合を亡命と呼び、そうでない場合、すなわち取るものもとりあえず、命からがら故郷を逃げ延びたような人々のことを難民と呼んでいる。

古くはモーゼがユダヤ人を率いてエジプトを脱出するエクソダス (exodus) がある。フランス革命後の貴族の亡命、すなわちエミグレ (Émigré) もある。ウィーン体制を崩壊に導いた1848年革命後の、ヨーロッパにおける国民国家の成立の際に起きた移動がある。20世紀前半に経験したことは、1917年のロシア革命後の反革命勢力の亡命、そして1930年代のユダヤ人のドイツ、オーストリア、ポーランドといったヨーロッパ諸国からの脱出である。

新たな国家を創造し、国民を作り上げるという企図の裏側には、必ず「非国民」を作り出し、それらを排除しようとする力学が生まれる。建国には理想や理念があり、国家構築のための理論が存在する。体制側において学問に携わるものは、新たな国家建設のための支配と統治の理論を組み立てる。国民が誰であるのかを確定し、その国民に保護と統制 (抑圧) を与えるのが国家である。こ

れまでの学問の発達、主としてこの体制側の統治の理論であった。社会学も例外ではない。必ずしも国の庇護を受ける大学で教育活動を行ったわけではないコント (Auguste Comte, 1798-1857) でさえも、フランス革命とナポレオン戦争により荒廃したフランスを再建することをめざす、その意味では統治のための社会学を作った。そのフランス社会学の伝統を受け継いだデュルケーム (Emile Durkheim, 1858-1917) が、社会の拘束性に大きな関心を抱いていたことは、しごく当然のことであった。

しかし国家から排除された人々の作り出す学問というものがある。ロンドンに亡命したマルクスは、労働者階級のための革命の社会学を作った。それを継承する「フランクフルト学派」も、その試みの一つに数えることができるであろう。これは第二次大戦中、ドイツからのユダヤ系亡命知識人が、拠点をフランクフルトからニューヨークに移しつつ形成した学派である。終戦後にはふたたびドイツに帰り、国の復興と学問の再建とに寄与した。これもまた統治する側、それから抑圧されたり、排除されたりした人々の側からみた社会学である。

本稿で取り上げたいのは、ロシアを亡命したフランスの社会学者ジョルジュ・ギュルヴィッチ (Georges Gurvitch, 1894-1965) である。彼は戦前から戦後にかけてのフランス社会学を牽引した有力な学者の一人である。彼もまた、排除された社会学者として出発した。しかし彼は成功した亡命ロシア社会学者でもあった。ここでいう成功とは、彼個人の事のみを指しているわけではない。ロシアの知的背景を背負った彼が、諸外国での研究活動を通じて独自の社会学体系を構築しただけではなく、それが異国の地で開花し、現代においても受け継がれている、という意味を含めての成功である。その彼の

\* Received December 8, 2021

\*\* 鎮西学院大学 現代社会学部 基盤教育センター Faculty of Contemporary Social Studies, Nagasaki Wesleyan University, 1212-1 Nishieida, Isahaya, Nagasaki 854-0082, Japan

\*\*\* 京都精華大学 国際文化学部, Kyoto Seika University, Faculty of Global Culture

社会学体系は、従来の欧米の社会学と比べてどのような特徴を有していたのか。さらにそれがフランス社会学という豊饒な土壌においてどのように根付いたのか。その後、フランスの社会科学において重要な役割をはたしていく「後継者」たち、わけでもジョルジュ・バランディエ (Georges Balandier, 1920–2016) ら後継者たちに、どういった形で継承されていったのか。そのことを明らかにするのが、本稿の課題である。

それは、国家という枠組みにおいて、政治的要因により排除された亡命知識人たちが、学際的、根源的な問いを立てることで、より広い世界を対象にしつつ、新たな理論を作り出そうと模索した結果生まれてきた、〈善く生きる〉ための社会学のほずである。単純なエンパワーメントの理論ではなく、変動してやまない社会システムの中で翻弄される人々に、善く生きるための指針を与える社会学である。したがってギュルヴィッチ社会学は、グローバリズムとナショナリズムが交錯する現代社会の変動を理解するための一層有効な視座を与えてくれるものであると考える。

## 1. 亡命ロシア知識人

ロシアからの亡命あるいは移民の波は、ソヴィエト・ロシアが成立し崩壊するまでの約70年の間に、幾度か訪れている。その最大の波は、いうまでもなく1917年のロシア革命後の移民第一波 (Первая волна эмиграции) である。おおむね1918年から1940年ごろまでの時期に国外脱出をはかった人たちの波である。この時期の亡命は、比較的諸外国の支援により、脱出ルートや交通手段が確保されていたこともあり、一般の市民だけではなく、政府高官や学者、幹部クラスの軍人らが、大挙して海外へと渡っていった。有名な「哲学者の船」には、のちに高名な学者として海外でも活躍することになるP. ストルーヴェ、N. ベルジャーエフやS. フランクらも乗っていた。ソローキン、ギュルヴィッチ、ティマシェフといった、当時、ロシア本国でもすでに名を成していた社会学者たちも、この第一波の亡命者の中に含ま

れている。

言語に着目すると、亡命ロシア人の場合、受容国においてロシア語での生活が可能となるようなコミュニティが形成された。代表的なものだけでも、プラハ、パリ、ベルリン、ハルビンなどに、その存在を確認することができる<sup>1</sup>。これらの都市では、単に生活基盤だけではなく、学術的な活動をサポートするような組織が作られた。ロシア語新聞の発刊をはじめ、ロシア人のための大学や研究所での講義、専門雑誌の刊行などがさかに行われた。ベルリンにはロシア科学研究所 (Russische Wissenschaftliche Institut = Русский научный институт) が、プラハにはロシア法学部 (Ruská právnická fakulta) があった。またパリにはロシア人民大学 (l'université populaire russe de Paris)、ハルビンには法学院 (哈爾濱法學院) があった。アメリカのニュースクール (New School for Social Research) も、ロシア人の数こそ多くはなかったが、亡命知識人のための研究機関の一つに数えられよう。

## 2. これまでのギュルヴィッチ研究

ギュルヴィッチ (Gurvitch Georges, 1894–1965) の研究経歴についていうと、フランス国内での活躍については、比較的よく知られているところである。しかしロシアやドイツ、アメリカなど、フランス以外での活動、業績については、ほとんど知られていないというのが実情であろう<sup>2</sup>。似たような境遇にあり、またアメリカで大成したP. ソローキンには『長い旅路 (Long Journey)』という自伝をはじめ、いくつかの自伝的記述がある。同時期にドイツおよびフランスで活躍したベルジャーエフにも、詳細な自伝がある (『わが生涯—哲学的自叙伝の試み』)。それにひきかえギュルヴィッチの場合は、自らを語ることが少なかった。「私の知的旅程」という人生を振り返った、簡単な自伝的エッセーぐらいであろう (Gurvich, 1966b, 1969)。

幸いなことに、先行研究に限っていうと、他の亡命ロシア知識人と比べてみても、かなり充実した蓄積があるといえる。それらは生前から没後、そして

<sup>1</sup> こうしたロシア人コミュニティを「在外ロシア (Зарубежная Россия)」と呼ぶ。その研究の古典としては (Ковалевского, 1971) がある。

<sup>2</sup> パリの社会科学高等研究院に、未整理ながらギュルヴィッチ文庫がある (L'Ecole des Hautes Etudes en Sciences Sociales. Centre d'Archives de Philosophie, d'Histoire et d'Édition des Sciences)。ギュルヴィッチの全体像を浮かび上がらせるためには、ここでのアーカイブ調査が必須となろう。

現在にいたるまで、継続的に書き継がれてきた。

Toulemont, René, 1955, *Sociologie et pluralisme dialectique. Introduction à l'œuvre de G. Gurvitch*, Louvain: Nauwelaerts.

野口隆、1961、『ギュルヴィッチ社会学の研究』  
関書院。

Duvignaud, Jean, 1969, *Gurvitch*, Paris: Seghers.

Swedberg, Richard, 1982, *Sociology as Disenchantment: The Evolution of the Work of Georges Gurvitch*, Atlantic Highlands: Humanities Press.

Saint-Louis, Fridolin, 2005, *Georges Gurvitch et la société autogestionnaire*, Paris: L'Harmattan.

Le Goff, Jacques, 2012, *Georges Gurvitch: Le pluralisme créateur*, Paris: Michalon.

よりいっそうギュルヴィッチの身近にいた社会学者によるギュルヴィッチ論としては、後に取り上げる、バランディエによる著作を挙げることができる。ギュルヴィッチの「人と著作」を論じたバランディエの著作は、のちに英訳が出るなど、フランス語圏・英語圏でのギュルヴィッチ社会学の普及に大きく貢献している。

Balandier, Georges, 1968, *Perspectives de la sociologie contemporaine: hommage à Georges Gurvitch*, Presses universitaires de France.

----, 1972, *Gurvitch*, Presses universitaires de France, Collection SUP, Philosophes.

----, 1975, *Gurvitch and phenomenological sociology*, translated from the French by Margaret A. Thompson ; with the assistance of Kenneth A. Thompson, B. Blackwell.

これらは主としてフランス時代のギュルヴィッチに焦点を当てたものである。フランスで活躍し、フランスで後継者を育てたギュルヴィッチであることから、それはしごく当然のことであるといえるだろう。だがその一方で、亡命以前、それから亡命期のギュルヴィッチに焦点を当てた研究が、あまりにも希薄であることは、ギュルヴィッチの全体像を把握するうえで、あまりにも心もとない。そうした状況は、近年、亡命ロシア人に関する研究が盛んになるにつれて、ようやく改善されつつある。ロシアを中心にこれまで見過ごされてきた亡命ロシア人のロシア国内での事績をとらえなおそうという研究動向が表れてきた。ここ

ではギュルヴィッチに触れた3人の研究を上げておきたい。

Simirenko, Alex, 1973, "Social Origin, Revolution and Sociology: The Work of Timishelf, Sorokin and Gurvitch," *British Journal of Sociology*, Vol. 24, No. 1, 1973, pp. 84-92

Дойков, Ю. В., 1996, *Георгий Гурвич - социолог-эмигрант первой волны* (=Ю. В. Дойков 「ギュルヴィッチ・社会学者・移民—第一波」)

Антонов, М.В., 2013, *Право и общество в концепции Георгия Давидовича Гурвича* (=アントノフ 『ギュルヴィッチの概念における法と社会』)

1970年代に書かれたシミレンコの論文は、ティマシェフ、ソローキン、ギュルヴィッチを取り上げ、亡命ロシア知識人を代表する社会学者として一括して取り上げた、画期的な研究である。しかしこの論文が書かれたころはまだ、1920年代ロシアの文献を自在に利用できるような時代ではなかった。そのため、対象となる文献は、主として欧米で発表されたものに限られている。ドイコフはロシアの亡命知識人を研究対象とする研究者で、P.ソローキンに関する著作もある。国内外の資料の収集、調査では定評がある。小著ではあるが、「ギュルヴィッチ・社会学者・移民—第一波」でも、彼の技量はいかなく発揮されている。さらにアントノフの著作は、ロシアから亡命期、さらにフランスで活躍し没するまでのギュルヴィッチをトータルに扱った、最初の著作であると考えていいだろう。

これらの先行研究をもとに、これより簡単に、ギュルヴィッチの略歴を振り返っておきたい。

### 3. ギュルヴィッチの略歴—ロシアから亡命まで

#### (1) ロシア

彼は1894年にロシア南部にある黒海沿岸の港湾都市ノヴォロシスク(Новороссийск)で、ユダヤ系の商人の家に生まれた。大学はユリエフ帝国大学(Императорский Юрьевский университет、現在のタルトゥ大学)で学んだ。そこでは、教会の権力を国家の下に置いたウクライナの18世紀の神学者フェオファン(Феофан Прокопович)に関心をもち、彼に関する法哲学についての論文を書いている。

1912年から第一次世界大戦が勃発するまで、彼は毎年のようにハイデルベルク大学やライプツィヒ大学を訪れ、新カント派の著作などに親しんで

いた。1905年から1912年にかけてのハイデルベルク大学は、ロシア人の「黄金時代」であった。ロシアで生まれ亡命生活を送りポーランドで没した哲学者ゲッセン (Сергей Иосифович Гессен, 1887-1950) とは、そこで知己となった。またハイデルベルク大学には、1919年から1956年まで「ロシアの精神史と文学」を講じたブブノフ (Николай Николаевич Бубнов=Nicolai von Bubnoff, 1880-1960) がおり、ドイツにおけるスラブ研究もすすめられていた。この時期のギュルヴィッチは、M. シェラー (Max Scheler, 1874-1928) の影響を強く受けていたという。

1915年8月にはペテルブルク大学法学部に編入している。このとき、ペテルブルクのフィヒテ研究セミナーに参加していることが注目に値する。それは後にドイツで書かれた博士論文のきっかけとなるものだからである。1900年から1917年にかけてのロシアは、いわゆる「金の時代 (Золотой век)」と呼ばれるほど、学術的研究が盛んであった。その当時のペテルブルク大学には、法学の大家ペトラジツキーが、この分野の指導的立場にあった。ペトラジツキーのもとに、ラゼルソン、ソローキン、ギュルヴィッチら優秀な学者たちが集まっていた。そうした環境下で、ギュルヴィッチは1917年にペテルブルク大学で修士号を取得している。さらに1920年には博士号を取得している。

しかし同年、亡命の第一波の中の一人として、彼はロシアを脱出しなければならなかった。ロシアを去る時に手にしていたのは、「フィヒテ」、「社会法の観念」、「社会的現実」だけであったという。

## (2) フィヒテおよびドイツ哲学への傾倒

亡命後のギュルヴィッチの足取りをたどってみたい。1921年に彼はまずベルリンに滞在した。ここでは活発に研究活動を行った。シュペングラーの『プロイセン主義と社会主義』をロシア語に訳したり、小著『フィヒテ哲学の統一 (Die Einheit der Fichteschen philosophie)』(1922) をまとめたり、あるいは「ロシアの最も偉大な思想家—ボリス・チュチェフとヴラジミール・ソロヴィエフ (Die Zwei Größten Russischen Rechtsphilosophen: Boris Tschitcherin und Wladimir Solowiew)」という論稿を発表したりした。

1923年には、ベルリンにロシア科学研究所 (Russische Wissenschaftliche Institut=Русский научный институт) が開設された。ここで彼は法学の講義を受け持つこととなる。また研究として

は、フィヒテに関する博士論文の準備を続けた。

こうしてまとめられたのが、ギュルヴィッチ『フィヒテ体系における具体的倫理学』である。

Georges Gurvitch, 1924, *Fichtes System der konkreten Ethik*, Tübingen: Verlag von G. Joseph Manz.

本書は実質的には、先述の小著『フィヒテ哲学の統一』を拡充して書かれた研究書である。大まかな内容を把握するために、目次を示すと、下記のとおり章題がなっている。

はじめに

### 第一部 フィヒテ倫理学の三つの時期における道徳的理念とその弁証法

序論

第1章 汎論理主義的道徳

第2章 非合理的ロマン主義的道徳

第3章 道徳的理念の弁証法的止揚としての精神についての説

第1節 第三期の理論的著作における道徳的理念としての精神の知識のための闘争と論理的前提

第2節 第三期の倫理的諸著作における純粋な道徳的唯心論の体系への上昇

### 第二部 フィヒテの道徳的形式主義の克服

序論

第1章 第一期では起きなかった道徳的形式主義との格闘

第1節 道徳的理念的質料

第2節 道徳的經驗的質料

第3節 道徳的無限性と価値

第2章 第二期の一元論的神秘的生の哲学における道徳的形式主義の克服

第3章 第三期における純粋な道徳的唯心論に基づく道徳的形式主義の克服

第三期の最初の作品

第1節 道徳的理念的質料

第2節 道徳的經驗的質料

第3節 道徳的無限性と価値

この時期のギュルヴィッチの関心は、個人主義と普遍主義の統一、あるいは個人的価値と超個人的価値の融和であった、といえよう。それらの対立概念を、弁証法的に統一する視点の獲得を目指していたといえるだろう。そのヒントとなるものが、「社会的な法」の中に潜んでいる、とギュル

ヴィッチは考えた。フィヒテの実践哲学についても、そうした立場からの解釈の道をさぐるとした。だがこれについて同じくロシアからベルリンに亡命していたS. フランクは、やや冷ややかに眺めている。フランクは、ギュルヴィッチが自らの考えをフィヒテの引用で牽強付会していると批判している。

以上のように、ベルリン時代のギュルヴィッチは、ドイツとロシアの思想的交流を積極的に図りつつ、自らのフィヒテの解釈を確立し、「社会的な法」というギュルヴィッチ独自の観念を練り上げていった時期であると言えるだろう。

### (3) チェコスロヴァキア

ベルリンに亡命したギュルヴィッチは、ほどなくしてプラハへ移った。1920年代初頭のプラハは、反ボルシェビズム知識人の活動の中心地であった。マサリクの主導で、ロシア・アクトという亡命ロシア人を支援する基金が作られていた。これにより亡命ロシア知識人は、生活と研究の両面でのサポートを得ることができた。1922年春にプラハに開設されたロシア法学部 (Русский юридический факультет) も、その一つである。準備にあたったのは、モスクワ大学の法学者・哲学者であったノヴゴロツエフ (Павел Иванович Новгородцев, 1866-1924) である。

1922年5月、ギュルヴィッチはロシア法学部に職を得、政治と国際法を教えた。ただし彼は、ただちに無給休暇をとり、1924年まで、ベルリンのプロイセン王立図書館 (現ベルリン州立図書館) でフィヒテの原稿を読むなどの、研究活動を続けている。

ソヴィエト・ロシアでは伝統的法学の研究が禁じられていたが、プラハではロシア人がその研究を続けることができた。その中には、上記ノヴゴロツエフのほか、ゴーゲリ (Сергей Константинович Гогель, 1860-1933)、アレクセーエフ (Николай Николаевич Алексеев, 1879-1964)、グリム (Давид Давидович Гримм, 1864-1941)、といった、すぐれた学者も含まれる。また講師陣にはアレクセーエフ (Николай Николаевич Алексеев, 1879-1964)、サヴィツキー (Савицкий Пётр Николаевич, 1895-1968)、(Георгий Владимирович Вернадский, 1887-1973)、スペクトルスキー (Евгений Васильевич

Спекторский, 1875-1951) ら、ユーラシア主義者も加わっていた。その一人イリーニン (Владимир Николаевич Ильин, 1891-1974) に対してギュルヴィッチは、ボルシェヴィキに類似する考え方であるとして批判している。ギュルヴィッチはボルシェヴィキに対しても西洋主義であるという批判を加えている。

特に1922年から1924年にかけての国際法コースが、彼の法社会学の確立のうえで重要な契機となった、とアントノフはいう。ギュルヴィッチは非国家主義的な国際法の一般理論について、ここで考察している。ギュルヴィッチの法社会学、法哲学の基本姿勢としては、チチャーリンのように法を個人主義にとらえるのではなく、ソロヴィエフのように普遍主義的、社会的なものにとらえるという立場をとっていた<sup>3</sup>。ギュルヴィッチは、すべての法 (権利) は本質的に社会的であると考えていたので、社会の法と個人の法の分離を認めない。

法というものは、統治に用いることで国家を絶対化することができる。しかし他方において、世界の法体系を並列に並べることで、国家を相対化することもできる。ロシア革命によりロシア帝国という国家がなくなり、新たにできたソヴィエトの権力者から国を追われた亡命知識人の国家や法律というものに対する見方は、あくまでも相対的であるところに特徴が見出せるだろう。実際にギュルヴィッチは法というものを、統治の手段としてではなく、相対的に観察するための手段としてとらえている。

ともあれギュルヴィッチを含め多くの亡命ロシア知識人にとり、プラハはたいへんに住みよいところであった。上記の学者たちの多くは、人生の一時期を、あるいは終生にわたって、この地で暮らした。オルシャンスキー墓地には、プラハを終の棲家としたロシア人たちが、数多く眠っている。その一方で、さらなる成功を求めて、ドイツやフランスやアメリカへと移るものも少なくなかった。その一人であったギュルヴィッチは、次にフランスへと向かった。

## 4. フランスにおける活躍

ギュルヴィッチのパリ生活がはじまるのは、1925年からである。それはフランスの数理哲学者

<sup>3</sup> ギュルヴィッチは政治信条としては、ミリュエコフ的な中道の立場を持っていたが、パリでの彼は、極力、政治活動を控えていた。

であったレオン・ブランシュヴィック (Léon Brunschvicg, 1869-1944) の助力による。1925年から1927年にかけてギユルヴィッチは、パリのスラブ研究所 (Славянском институте в Париже = Institut d'études slaves) で働き口を得て、同時にパリ大学ロシア法学部 (Русском юридическом факультете при Парижский университет) でも教鞭を執っていた。また「ロシア移民研究所 (научных институтах русской эмиграции)」では、ロシアおよび現代の法哲学に関する講義を受け持った。

さらに1927年からは、ソルボンヌ大学に移り、ようやく安定した生活を手に入れることができた。ここでは現代ドイツ哲学コースを担当する。どうしてギユルヴィッチは、ここで哲学を講じるようになったのか。それは彼がドイツからフランスへ移動したこととも関わってくるのだが、1930年代前後のフランスがロシア法哲学の水準の高さを認めるようになった、というのが1つの理由として考えられる。特にドイツ哲学の理解の点で、ロシアの学者たちは、フランスにおいて高く評価された。コイレ (Александр Койре, 1892-1964)、コジェーヴ (Александр Кожев, 1902-1968) やレヴィナス (Эммануэль Левинас, 1906-1995) ら、帝政ロシアから移ってきた学者が活躍できたのも、そうした機運のあらわれであったといえよう。こうして、フランスでのドイツ哲学への関心、わけでも現象学やハイデガーへの関心の高まりは、サルトル (Jean-Paul Sartre, 1905-1980) やメルロポンティ (Maurice Merleau-Ponty, 1908-1961) といった同世代の哲学者たちを、大いに刺激した。

ギユルヴィッチが一度目のフランス滞在をした二つの世界大戦の間に挟まれた1930年頃は、当時のフランス社会科学の源流を形成していたデカルト、カント、そしてデュルケーム学派の継承者たち<sup>4</sup>が、マルクス、エンゲルスなどの思想と政治形態としての共産主義と社会学との繋がりに興味を持ち、マルクスの功績を「社会科学」の枠組みの中で評価し始めた時期であった (Gouarné, 2011: 73)。これには、当時の共和国において共産党が力を持ち、知識人の中にも自ら労働組合や政党運動などを通して、政治に直接参与しつつ理論と政治実践とを紐付けようとするマルクス主義学派が現れるなど、学术界と政治との繋がりが強まった時代背景も影響している。

フランスにおけるマルクス主義社会学は、後の植民地研究や戦後のポストコロニアルスタディーズの分野にも影響を与え、特に資本主義や全体主義によって生み出される力や従属関係について明らかにしようとする政治人類学、民族学の分野で継承者を多く生み出すことになった。ギユルヴィッチ本人も、1950年代にソルボンヌ大学で教鞭をとった際、彼自身の講義をもとにした『社会階級に関する研究 (Etudes sur les classes sociales)』(1966年刊)の中で、マルクスの思想とマルクス主義の継承者 (カウツキー、レーニン、ブハーリン、ルーカスなど) について批判を交えつつ論じている (Gurvitch, 1966)。自らも国家という巨大な機械とその生産の仕組み、全体主義、世界大戦という時代の背景に翻弄されたギユルヴィッチが、社会階級や資本主義、共産主義、労働闘争などのテーマに興味を持ったのは自然な流れであると言える。ギユルヴィッチは同時にそうした社会そのものを動かす理論を生み出す社会科学の形成過程そのものに興味を持ち、いわゆる「社会学の社会学 (sociologie des sociologies)」を実践することとなる (Balandier, 1972: 9)。そうした意味で、彼の研究と実績、人生は常に実社会との関係性を保ちつづけていたといえてよい。

パリに初めに滞在した1920年代、1930年代当時のフランスにおける若きギユルヴィッチは、ある種、不完全燃焼であったロシアに対する自らの愛国心の置き場を求めるように勉学に打ち込み、仏語の法学、社会学、社会主義、労働組合運動などに関する調査を熱心に行った。この初期の滞中で、当時フランスの学术界で大きな影響力を持っていた学者達と学術的な交流を持ち、また個人的な友好関係を築くことで様々な影響を受け、また与えている。特にソルボンヌ大学でギユルヴィッチがその講義を聴講したユダヤ系哲学者のレオン・ブランシュヴィック (Léon Brunschvicg 1869-1944)、道徳や習俗 (ムルス・moeurs) に関心を寄せるきっかけを作ったりリュシアン・レヴィ＝ブリュール (Lucien Lévy-Bruhl 1857-1939)、ギユルヴィッチとは長い友好関係を築き戦後フランスの哲学アカデミズムに大きな影響力をもつことになるジャン・アンドレ・ヴァール (Jean André Wahl, 1888-1974年)、そして彼に多大な影響を与え、「全体的社会現象

<sup>4</sup> 後にあげるモーリス・アルヴァクスも、デュルケーム学派の継承者といえる。

(Phénomène Social total)」を巡って思索を巡らす原型を示したマルセル・モース (1872-1950) など、当時フランスの学术界の中心を担っていた知識人たちの面々と、初めのフランス滞在の時より関わりを結んでいる (Balandier, 1972: 8)。最後に、集会的記憶の提唱者であるモーリス・アルブヴァクス (Maurice Halbwachs, 1877-1945) からは、ギュルヴィッチ本人が1935年にストラスブール大学の教鞭を受けつづことになる。

モースやレヴィ＝ブリュールは、哲学や社会科学の第一人者でありながら、当時フランスでもまだ確立されていなかった民族学の分野を確立していった学者であると言ってよく、後のフランスの人類学や民族学に大きな影響を残している。

これらの学者たちとギュルヴィッチとの人間関係やそれが彼のその後の思想や研究成果に与えた影響などについては、さらに詳細な調査を行うことで明らかにしていく必要がある。

#### (1) ドイツ哲学の紹介者として

フランスにおけるギュルヴィッチはドイツ(法)哲学の素養を発表する機会に恵まれている。またロシアの法哲学をドイツ語で発表することで、ロシアの学問水準を、ドイツをはじめとする諸外国に示すこともできていた (Gurwitsch, 1923b)。これらの論文が、フランス人の目に留まったようである。1927年からのソルボンヌ大学での現代ドイツ哲学に関する講義は、1930年に『現代ドイツ哲学の諸動向—E.フッサール、M.シェラー、E.ラスク、N.ハルトマン、M.ハイデガー』としてまとめられた (Gurwitsch, 1930)。

これを書評したベルジャーエフ (Бердяев, 1930) によると、フランスでは評価の定まっていなかった、ドイツ哲学の新しい潮流をいち早く紹介したことについて、ギュルヴィッチの功績を認めている。そのドイツ哲学の潮流としては、フッサールの現象学であり、さらにその発展的形象といえるハイデガーの哲学であった。

現象学運動は、当時ヨーロッパで最も重要な哲学的潮流であった。ベルジャーエフの解釈によると、新カント派の認識論的理想主義は、哲学を行

き詰まりに向かわせた。それを批判する形で20世紀初頭のロシア哲学は生まれてきたのだという。そしてこれと同じ動きが、現象学の中にもある。とくに直観主義、そして存在論への回帰というところに、現象学の新鮮さがあったといえるだろう。

ギュルヴィッチに関する戦前のフランスでの活動としては、その他に、1920年から1940年にかけてパリで発行されていたロシア人の文芸誌『現代の雑記 (Современные записки)』の同人らとの交流が挙げられよう。1928年4月には、在フランスのロシア・フリーメイソンのロッジ「北極星 (Северная Звезда)」に加盟している。ここで想起されるのは、ギュルヴィッチがフィヒテに着目していたことである (Антонов, 2013, c.56)。フィヒテも一時期フリーメイソンとして活動していたことがある (湯浅慎一, 2006)。1937年にストラスブールへ、1941年から1945年までアメリカへと移動が可能だったのは、フリーメイソンとの関係があったからだとされている。

1928年にギュルヴィッチは念願のフランス国籍を取得している。1931年に出版された『現代の社会法の観念』(Gurvitch, 1931) で、国際的な名声を勝ち得ることとなった。1932年から1934年にかけて、セヴィニエ大学 (Collège Sévigné) で哲学を講じることになる。翌1935年には、ストラスブール大学でアルヴァックス (Maurice Halbwachs, 1877-1945) の跡を継ぐことになる。こうして1930年代以降、ギュルヴィッチはフランスの法社会学の分野において、重要な人物としての地位を獲得していった。

#### (2) アメリカへの二重の亡命と戦後フランスの社会学

ナチスドイツのフランス占領を機に、ギュルヴィッチは1940年10月、アメリカに亡命することを決意する。彼にとっては二重の亡命ということになる。後に構造主義をめぐって論争を行う<sup>5</sup>レヴィ＝ストロース (Claude Lévi-Strauss, 1908-2009) も、この時、アメリカに亡命している。ニュースクールから独立した高等自由学院 (Ecole libre des Hautes Etudes) の設立 (1942年) にもギュルヴィッ

<sup>5</sup> まずギュルヴィッチが論稿「社会構造の概念」(Gurvitch, 1955) でレヴィ＝ストロースを批判したことから始まる。これについてのレヴィ＝ストロースによる反論は、彼の『構造人類学』で行われている。さらにギュルヴィッチの再批判は「社会構造」、「社会的機能」および「制度」概念の忘れられた起源—ハーバート・スペンサー」(Gurvitch, 1957) と続いた。

チは関わっている。アメリカでは「経験的社会学 (sociologie empirique)」の影響を受けている。1944年から1945年にかけて、彼はソローキンも在職していたハーバード大学で、知識社会学を講じた。『20世紀の社会学』(Gurvich and Moore eds., 1945)はこの時の産物である。西ヨーロッパやアメリカに限らず、ロシア、チェコ、ルーマニア、ハンガリーといった、これまで取り上げられることの少なかった国々の社会学の歴史を扱っているところに、亡命知識人としてのギユルヴィッチの経歴が反映しているといえよう。

1945年9月にフランスに帰国してからの活躍ぶりにも目を見張るものがある。1946年に社会学研究所 (Centre d'Etudes Sociologiques: CES) を設立し、戦後のフランス社会学の立て直しに貢献した。1948年よりパリ大学の社会学教授となり、高等研究実習院 (École pratique des hautes études) の院長をつとめるなどしている。

1950年には、ふたたびソルボンヌ大学教授に復帰し、フランス大学出版 (Presses Universitaires de France) から現代社会学叢書 (Bibliothèque de sociologie contemporaine) の刊行を開始した。ギユルヴィッチ自身『社会学論集』(Gurvitch ed., 1957) や『知識の社会的枠組み』(Gurvitch, 1966a) をこの叢書の中におさめている。

ギユルヴィッチは社会や政治の場面を動かす社会理論の構築にも興味を持ちつつ、常に自らの政治的な態度を明確にしてきた。晩年にアルジェリア戦争をめぐる、ドゴール政府に対する反対の意思を表明したことがきっかけとなり、1962年、秘密軍事組織 (Organisation de l'armée secrète) に自

宅のドアに爆弾を仕掛けられ、けがを負う。この時、一時的にマルク・シャガール (Marc Chagall, 1887-1989) の家にかくまわれたという逸話がある (Bosserman, 2007)。そのけががもとで、1965年12月10日にパリで亡くなった。

## 5. 階級闘争に関する分析と動態派社会学

多岐にわたるギユルヴィッチの学問遍歴から生まれてきた彼の社会学思想を、包括的に理解することは困難であるが、ここでは特にフランスにおいて当時議論の中心を担っていた社会階級 (classes sociales) 研究との関わりに着目しつつ、「動態学派」と呼ばれることになるギユルヴィッチの学術的アプローチについて論じたい。

先述したように、マルクス主義社会学に基づく階級闘争に関する議論の発展、戦中、戦後の政治背景やその後の技術官僚主義統治 (テクノクラシー) の展開は、当時のフランスの学術界に大きな影響を与えていた。フランスにおいて民族学 (ethnologie) と呼ばれる分野が発展した背景には、その創始者となった学者達が、同時に植民地との関わりにおいて政治的な役割を担う官僚でもあり、アジアやアフリカにおける「未開社会」の理解と統治のために多額の予算を伴って派遣されていたことに多く拠っている (Copans, 2016)。

社会学はフランス本国や欧米など先進国の社会を分析する枠組みとして、民族学や文化人類学はアフリカやアジア、アラブ地域など非西洋社会を研究する学問として、それぞれ確立されていく<sup>6</sup>。こうした背景の中、階級闘争や従属関係、支配構造に関する研究やマルクス主義社会学<sup>7</sup>は、欧米

<sup>6</sup> ギユルヴィッチの思想を受け継いだバランディエが、初期の研究成果において「民族学者」(ethnologue) という呼び名を避け、自ら好んで「社会学者」(sociologue) を名乗っていたのには、未開社会などの分け隔てなく、変化し政治体系を持った「社会」として、これらの社会を欧米と共通の分析概念をもって理解しようとした姿勢によっていると考えられる。1950年以降は、ヨーロッパに留学した現地の知識人や研究者が西洋の政治思想や社会主義などに影響を得て、学術的な活躍をすることにより、徐々に「政治人類学」や社会学、開発学など多様な文脈からアフリカやアジア地域を分析する研究が増えていく。

<sup>7</sup> 当時のマルクス主義社会学については、宇津が1965年に以下のようにまとめている。「現代のマルクス主義社会学の基本的性格は、一方では、マルクス・レーニン主義の名において、社会学を科学の列に加えること、他方では、新しい現象の説明のためのマルクス・レーニン主義の創造的発展を口実にして、マルクス・レーニン主義を修正すること、この二つの側面がたがいに結びつき、おぎないあって、マルクス主義社会学の性格を形づくっている。この際、第二インターナショナルのマルクス主義社会学との相違は、「世界人口の三分の一以上が社会主義の道にふみだした」状況を反映して、「社会学の名においてマルクス主義を科学の列に加える」という側面が「マルクス主義の名において、社会学を科学の列に加える」という側面に転化した点に見出される」(宇津, 1965: 93)。



社会におけるプロレタリア研究と、植民地研究における支配や権力、生産体系に関する研究との接点となり、フランスにおける一部の社会学者や民族学者の注目を浴びることになる。後のサバルタンスタディーズやポストコロニアルスタディーズに継承されることになるこの系譜は、ギユルヴィッチ活躍当時のフランスで既にその素地が発展しつつあった。

当時フランスにおける社会学は、産業化と二回の世界大戦を経てマルクス主義の影響を受けた階級闘争に関する研究が盛り上がりを見せていた。ギユルヴィッチは当時汎用されていたマルクス主義的「階級 (classes sociales)」概念に関して、近代社会を理解する上での一定の分析軸を提示した点について評価しつつ、それがより包括的、俯瞰的な概念とならぬまま資本主義社会や近代社会における従属関係を説明するキーワードとして汎用されていることを批判する。ギユルヴィッチにとって「階級 (classes sociales)」は、彼が提唱した「弁証法的超経験主義 (L'hyper empirisme dialectique)」、そして「全体的社会現象 (Phénomènes Sociaux totaux)」を通して、その特徴を描き出すことができる「社会的集団」の一つの形であると位置づけている (Balandier, 1972 : 30)。

ギユルヴィッチが規定した「弁証法的超経験主義 (Hyper-empirisme dialectique)」(Gurvitch, 1953) とは、どのようなものなのか。人間は経験によってものごとを認識する。それらの認識は感覚的、論理的、精神的なものなどが重層構造を織りなし、互いに浸透しあいながら社会・現象を形

成していく。ギユルヴィッチはその階層構造に関する分析について、「深層社会学 (sociologie «en profondeur»)」として展開するが、この理論は、彼が初期に影響を受けたアンリ・ベルクソンや現象学者達の理論、そしてブルードン、マルクス、デュルケムといった多様な社会学理論の影響を受けていると言えよう。

しかしそうした多層構造をなす認識さえも、あくまでも相対的・流動的なものでしかない。ある固定化した認識枠組みや上層構造があるわけではなく、それこそ、それ自体が変容を続ける多種多様な認識枠組みが考えられる。ギユルヴィッチの弁証法は、理性的認識や経験による理解といったものが固定され、一種の教義「ドグマ (dogme)」として定型化、汎用化されることを拒むためのものである。経験と認識の弁証法、様々な認識の弁証法、そして最後にその弁証法自体も弁証法化するという、際限のない繰り返しを意味している。

しかし、ギユルヴィッチの社会学は、こうした深層構造をもつ社会現象を、「全体的社会現象 (Phénomènes Sociaux totaux)」<sup>8</sup>としてその全体像を描き出す必要性を指摘する。重層構造の中で影響を受けつつ、常に変容していく総体としての社会現象、それがギユルヴィッチが彼の理論や実践を通して描き出そうとしていたそれぞれの事例—近代のフランス社会やロシアにおける政治変動に関する事例研究—に対するアプローチであったとあってよい。

こうした見地より、マルクス主義的文脈における「階級」概念について、ギユルヴィッチは彼が15の特徴<sup>9</sup>の組み合わせでもって分析した「社会

<sup>8</sup> ギユルヴィッチはこの理論をモースに依りつつ、「贈与論」における全体的認識について批評し、「全体的社会現象」を理解するための弁証的アプローチの必要性を述べている。「モースが社会学における即断的な因果的説明を排して、原因は経済にも人口にも法にも呪術にも宗教にも求められず、社会枠或は社会累計の不可分的全体に求められなければならないとする、「全体的社会現象」の原理を高く評価しつつ、モースが最初から「全体的社会現象」の諸面をあまりに近づけ、先ずそれらを明確に区別し、その喰違い、緊張、闘争、背反の事実を記述し、その後でそれらを一の全体、すなわち一の社会類型乃至社会枠の全体に積分することをしなかったことを遺憾としている。即ちモースの分析には弁証法的要素が欠けていた」(野口, 1955 : 23)。

<sup>9</sup> ギユルヴィッチの言う階級の15の特徴とは、下記の通りである。①機能の数 (単一、複数、超機能グループ)、②機能および焦点の性質、③参加者の数、④予想される期間、⑤参加者の入れ替わりの意味を含む周期、⑥分散の程度、⑦常設集団との「距離」、⑧形成様式、⑨事実上の参加または自発的もしくは強制的な参加、⑩アクセス様式 (「開放」、「条件付」、「閉鎖」集団)、⑪組織の程度と統治原理、⑫社会全体との関係、⑬集団間の互換性の程度、⑭集団を権威主義または民主主義の性格にする制約様式、⑮その形成を保証する合成様式に応じた統一性の程度 (「単一」、「連邦主義 (fédéraliste)」または「連合主義 (confédéraliste)」(Gurvitch, 1966c ; Balandier, 1972 : 32)。

的集団」の表象として分析し、以下のように定義している。

「階級 (classes sociales) とは] 特定の隔離された集合体であり、超越化された機能 (suprafonctionnalité) を持つ高度に構造化された傾向をもつ集まりであり、グローバル社会からの浸透に抵抗し、互いの根本的な非互換性によって特徴付けられる」(Gurvitch, 1966)。

こうしたアプローチにより、ギュルヴィッチはそれまで資本主義と産業化という特殊な時代背景により固定化され、理解されていた「階級」概念について、それが順位や組み合わせの問題であること、支配、階層、不平等のシステムは、さまざまな複雑さで組み合わせられ変容しながらあらゆる社会の枠組みを構成するが、必ずしも共産主義的文脈における「階級社会」を生み出すとは限らないことを論じている。

無論こうしたギュルヴィッチの態度には反論もある。宇津は、1965年の時点でこうしたギュルヴィッチのマルクス主義社会学へのアプローチと、それに追随するアンリ・ルフェーヴルの理論について、辛辣な批判を展開している。宇津によると、ギュルヴィッチの理論は「具体的闘争を観念的闘争に転化」するものであり、「対立物の統一だけに注目していろいろな側面の連関と相互作用を等分に見るが、相互作用の基礎である闘争を軽視」するものである(宇津, 1965: 107)と述べ、「ギュルヴィッチの理論では、マルクス主義は豊かにはならない」だろうと言い切っている。マルクス主義が社会科学の分野で見直され、ある種の社会変革と学術界の変革のインパクトを持っていた当時の現状を踏まえ、こうした批判を理解する必要があるだろう。その後、半世紀が経った現在、マルクス主義自体の歴史的、政治的評価が繰り返し議論され、再検討された後のフランスや日本において再度ギュルヴィッチの理論の新たな読み込みと再評価が有用なのではないだろうか。

次に「弁証法的超経験主義 (Hyper- empirisme dialectique)」についても見ておこう。この概念は、かつてはいくつかの研究や議論がなされていたが、その後、包括的な分析に継承されないまま、現代フランスにおける社会科学では、かえり

みられなくなりつつある概念である。しかし、ギュルヴィッチの技法は、時代背景により特定化・定型化された個別の理論や社会科学の概念を超えて、より包括的・柔軟なアプローチによって世界の異なる社会現象や政治現象を同様の人間社会の営みとして分析しうる可能性を示唆するものである。それはまさに現代における学際的、グローバルな見地からの研究の在り方に大きな示唆を与えるものではないだろうか。

ロシア、チェコ、スロヴァキア、ドイツ、フランス、アメリカといった国々を渡り歩いたギュルヴィッチ、哲学、法、社会学、人類学の分野を横断したギュルヴィッチだからこそ、そうした認識枠組みの相対性を堅持しえたのだろう。硬直した認識枠組みのように思えるものの基礎が、実は変容する可能性・流動性を含み持っている。認識枠組みには不断の変更が加えられるべきであり、その変化を作り出す動きそのものが研究対象となる。こうして古い認識枠組みと、新たな枠組みのとの対立が浮き彫りになる。この対立関係の検証こそが、ギュルヴィッチのいう弁証法である (Balander 1972: 23)。このような弁証法的な変化のダイナミズムをとらえようとするギュルヴィッチの立場は、のちに「動態派 (école dynamiste)」<sup>10</sup>あるいは「動態的社会学 (Sociologie dynamiste)」と呼ばれるようになった(アンサール, 2004; 石川, 1994)。

そうした弁証法的超経験主義の知見から浮かび上がってくるのは、社会的現実 (réalité sociale) の全体像である。ギュルヴィッチがいうように、「いわゆる個人または集合意識は共在的 (consubstantiel) で、不可分である。個人と社会、個別と全体が相互に浸透しあっていて、不可分の関係にあるというのが、ギュルヴィッチの主張であった。したがって「具体的な全体を把握しよう」とすると、それらが互いに重ね合わされ、相互に浸透し、互いに内在している」ことから目を離してはいけない (Gurvitch, 1950, 90)。

## 6. 移動・変化する知識人としてのギュルヴィッチとバランディエ

ギュルヴィッチの教え子でもあり、フランスに

<sup>10</sup> もちろんこの「学派」という言葉は、後の時代の学者が、彼らを総括する際に使った便宜的な言葉である。ギュルヴィッチおよびバランディエらが積極的に用いたわけではなく、むしろ「学派」の形成に批判的でしたらあったことは、ここで強調しておきたい。

おける共同研究者として20年以上にわたりギユルヴィッチの学術活動に寄り添ったジョルジュ・バランディエ (Georges Balandier, 1920-2016) は以下のように述べている。「ギユルヴィッチは決して一つところに留まることをしなかった。それは彼自身の選択でもあったし、彼の生きた世紀の変動に彼自身が深く関わっていたからでもある」(Balandier, 1972: 5)。

ギユルヴィッチは、彼自ら変動の時代を生き、またそのためであろうか、理論やシステム、全体主義といった型にはまった組織や「学派」に対して、あるいは知識の停滞や定型化に対して、きわめて批判的であり、常に新たな社会の動きを理解することに挑戦し続けた。当時、ロシア、ドイツ、チェコスロヴァキア、フランス、アメリカと多様な社会の変動のただなかで活動し、多角的かつ包括的な視点から分析を行った知識人は稀有である。社会と、それを理解するための知識の形成双方に積極的に関わり続け、学際的、国際的な活動を展開する知識人としてのギユルヴィッチの態度は、次の世代を担うことになるフランス人の学者達に非常に大きな影響を与えた。

特にアメリカからフランスに戻ったのち、1946年にギユルヴィッチが創始した「国際社会学誌 (*Cahiers internationaux de sociologie*)」で活躍した社会科学の第一人者たちの中には、ジョルジュ・フリードマン (Georges Philippe Friedmann, 1902-1977)、マルクス主義社会学者として知られるアンリ・ルフェーヴル (Henri Lefebvre, 1901-1991年)、世界史研究に大きな変革を起こすこととなるフェルナン・ブローデル (Fernand Braudel, 1902-1985)、イスラーム学者でありアルジェリアの脱植民地化の歴史に深くかかわったジャック・ベルク (Jacques Augustin Berque, 1910-1995)、精神社会学、ラテンアメリカ研究で活躍することになるロジェ・バスティード (Roger Bastide, 1898-1974) 等、フランスの社会科学を担った面々が当時よりギユルヴィッチを囲んでいた。この研究誌の編集メンバーの中には、先述したレヴィ＝ストロースも参加しており、構造主義を巡って意見を戦わせたことは先に触れたとおりである。

これらのフランス知識人のそれぞれの専門分野

やその後の活躍の方向性を見ると、ギユルヴィッチが決して学問的、学術的枠組みを固定化させることなく、学際的な広さをもった社会科学の展開を目指していたことがうかがえるだろう。

こうした特徴をもつギユルヴィッチの社会学を、特に戦後のフランス社会学、文化人類学の現場において適応することに成功した一人として、ジョルジュ・バランディエ (Georges Balandier, 1920-2016) が挙げられる<sup>11</sup>。彼は「植民地の状況 *Situation Coloniale*」を多角的な観点から説明することにより、当時のアフリカ社会を分析した(『黒ブラザビルの社会学』『黒アフリカの現在の社会学』)。ここでいう多角的な観点というのは、アフリカの歴史、社会、経済、文化、宗主国との関わりなどを意味する。こうした観点から、バランディエはアフリカの社会・政治変容、都市と労働者の世界、「植民地状況」(*Situation coloniale*)での現地の社会の動きと変容、そして解放運動をとらえようとした(嶋田, 1993)。

バランディエはギユルヴィッチの社会学を「自由の社会学」と、位置づけ、そこで定義される自由もまた社会の複雑な要因の中で相対的なものであることを論じた。ギユルヴィッチと「自由」の概念に関する論考は、また紙面を改める必要があるが、バランディエがまさに独立を果たしていく当時のアフリカ諸国における社会科学の発展に自ら関わり、現地で活躍していく知識人や研究者の育成に携わりながら、決して学派や理論を強要しなかった姿勢は、フランスの学術界に「アウトサイダー」として根を下ろしつつ、計り知れない貢献をしたギユルヴィッチのフランスとフランスの学術界に対する関わり方との類似点が見いだせるのではないか。それに加え、変化するアフリカ社会を「未開社会」として欧米と全く別のものとしてその構造を類型化し、分析していた当時の民族学や人類学とは一定の距離を置き、西欧と変わらぬ人間の政治・経済・文化の総体である「変化し続ける社会」として、より世界的な視点から分析していく姿勢には、ギユルヴィッチの「弁証法的超経験主義」の実践的な継承が垣間見られる。ここに、亡命知識人の思想がフランスの社会学、民族学のアルテナティブを提示したバランディエの思想において花開いた成果を確認することができ

<sup>11</sup> ドゾン は、バランディエが引き継いだギユルヴィッチの遺産について、「非教条主義 (non-dogmatisme)」という側面があることを指摘している (Dozon, 2017: 816)。

るのではないだろうか<sup>12</sup>。

## むすび

世界戦争とロシア革命、そして二重の亡命、あるいは滞在した国々の学問の批判的受容と自らの学問の刷新、それがギュルヴィッチの生涯であった。晩年、アルジェリア独立を支持したことで、それに反対する団体から、自宅に爆弾が仕掛けられるという悲劇をこうむった。ロシア革命の渦中に現前で繰り広げられたテロを、半世紀後に再び対面したといえるかもしれない。常に変動の中に身を置き、対立関係を直視し、歴史の変化を過程において思考すること、それがギュルヴィッチのいう「弁証法的超経験主義」であった。ギュルヴィッチ自身の社会学は、実証的に何かを明らかにする課題からは、遠く離れている。しかし離れているように見えても彼の学問と思想は、植民地独立（バランディエ）あるいは新しい社会運動（トゥレーヌ）といった、きわめてアクチュアルな問題をとらえる社会学として発展した。常に様々なレベルで変容しつつ、内外の社会や国境を越えた社会現象と複雑に繋がっている社会現象の理解が求められている現代の社会科学において、改めてギュルヴィッチ社会学とその継承について調査し再評価していく必要があるのではないだろうか。本稿がその問題提起の一端を担えることを期待したい。

## 参考文献

### ◆欧文献

- Антонов, М.В., 2013, *Право и общество в концепции Георгия Давидовича Гурвича*, Издательский дом Высшей школы экономики.
- Balandier, Georges, 1967, *Anthropologie politique*, Paris, Presses universitaires de France, 中原喜一郎訳, 1971, 『政治人類学』合同出版.
- , 1972, *Gurvitch*, Presses universitaires de France, Paris.
- , 1986, *Sens et puissance : les dynamiques sociales*, 3ème édition, PUF, Paris.
- , Roger Bastide, Jacques Berque et Pierre George dir., 1968, *Perspectives de la sociologie contemporaine. Hommage à George Gurvitch*,

Paris, Presses universitaires de France.

- Banakar, Reza, 2001, “Integrating Reciprocal Perspectives: On Georges Gurvitch’s Theory of Immediate Jural Experience,” *Canadian Journal of Law and Society*, Vol. 16, No. 1, pp. 67-91.
- , 2006, “Georges Gurvitch” in *Encyclopedia of Law and Society: American and Global Perspectives*. Thousand Oaks: SAGE.
- Belley, Jean-Guy, 1986, “Georges Gurvitch et les professionnels de la pensée juridique” in *Droit et Société*, vol.4, pp. 353-370.
- Бердяев, Н.А., 1930 “О новейших течениях в немецкой философии. Гейдеггер,” *Путь*, № 24. С. 115-122.
- Bosserman, Phillip, 1968, *Dialectical Sociology: An Analysis of the Sociology of Georges Gurvitch*, Boston: Porter Sargent.
- , 2007, “Gurvitch, Georges Social Change,” in George Ritzer ed. *The Blackwell Encyclopedia of Sociology*.
- Carbonnier, Jean, 1986, “Gurvitch et les juristes” in *Droit et Société*, vol.4, pp.347-351.
- Choi, Chaanshik, 1978, *Freedom and Determinism: The Promethean Sociology of Georges Gurvitch*, Ph.D. Dissertation at New School for Social Research, New York, N.Y..
- Duvignaud, Jean, 1966, “Georges Gurvitch, *Études sur les classes sociales*, Paris, Éd. Gonthier, 1966,” *L’Homme et la société*, 2, no. 1, pp.185-185.
- Dozon, Jean-Pierre, 2017, Georges Balandier et la reconstruction d’Après-guerre de la sociologie française, *Cahiers d’études africaines*, Vol. 57, Cahier 228 (4), pp.809-818.
- Gouarné, Isabelle, 2011, “Marxisme et durkheimisme dans l’entre-deux-guerres en France,” *Durkheimian Studies / Études Durkheimiennes*, 17, pp. 57-79.
- Gurwitsch (=Gurvich), 1922, *Die Einheit der Fichteschen Philosophie (Personal und Gemeinschaftswert in der Ethik Fichtes, Lfg. 1)*, Arthur Collignon.
- , 1923a, “Die Zwei Größten Russischen Rechtsphilosophen: Boris Tchitcherin und Wladimir Solowiew,” *Philosophie und Recht*, Bd. 2, S. 80-

<sup>12</sup> バランディエの動態派社会学については、例えば (Balandier, 1967, 1986) 等を参照。ギュルヴィッチとバランディエの関係、バランディエにおける展開については、また新たな論考として発表したい。

- 102.
- , 1923b, “Übersicht der neueren Rechtsphilosophischen Literatur in Russland,” *Philosophie und Recht*, Bd. 2. S. 111-125.
- , 1924, *Fichtes System der konkreten Ethik*, Tübingen: Verlag von G. Joseph Manz.
- , 1930, *Les tendances actuelles de la philosophie allemande: E. Husserl, M. Scheler, E. Lask, N. Hartmann, M. Heidegger, préface de Léon Brunschvicg*, J. Vrin.
- , 1931, *Le temps présent et l'idée du droit social*, Paris: Librairie Philosophique J. Vrin.
- , 1942, *Sociology of Law*, Philosophical Library, Alliance Book, 潮見俊隆, 壽里茂訳, 1987, 『法社会学』 日本評論社.
- , 1950, *La vocation actuelle de la sociologie* (2 tomes), PUF, 寿里茂訳, 1970, 『社会学の現代的課題』 青木書店.
- , 1953, “Hyper-empirisme dialectique : ses applications en sociologie,” *Cahiers Internationaux de Sociologie*, Vol. 15, pp.3-33.
- , 1954, *Le concept de classes sociales de Marx a nos jours*, Centre de Documentation Universitaire, 佐々木光訳, 『社会階級論—マルクスから現代まで』 誠信書房.
- , 1955, “Le concept de structure sociale,” *Cahiers internationaux de sociologie*, vol. 19, 1955.
- , 1957, “Une source oubliée des concepts de ‘Structure sociale,’ ‘Fonction sociale’ et ‘Institution’: Herbert Spencer,” *Cahiers Internationaux de Sociologie*, vol.23, pp.111-121.
- , 1962, *Dialectique et sociologie*, Paris, Flammarion.
- , 1966a, *Les cadres sociaux de la connaissance*, Paris: Presses Universitaires de France.
- , 1966b, “Mon itinéraire intellectuel ou l’exclu de la horde”, in *L’homme et la société*, no. 1, pp. 3-12.
- 1966c, *Études sur les classes sociales*, Paris, Éd. Gonthier.
- , 1969, “My Intellectual Itinerary or ‘Excluded from the Horde’,” *Sociological Abstracts*, vol.1, No2, pp.1-13.
- Gurvich, G. ed., 1957, *Traité de sociologie*, Paris: Presses Universitaires de France.
- , Wilbert E. Moore eds., 1945, *Twentieth Century Sociology*, New York: The Philosophical Library, 東京社会科学研究所監修, 1958-1960, 『二十世紀の社会学』 誠信書房.
- Alan, H., 1979, “The Sociology of Law of Gurvitch and Timasheff: A Critique of Theories of Normative Integration” in *Research in Law and Sociology*, Vol. 2, pp.169-204.
- Ковалевского, П.Е., 1971, “Зарубежная Россия. История и культурно-просветительная работа русского зарубежья за полвека (1920-1970 гг.)”. Париж.
- Lévi-Strauss, Claude, 1958, *Anthropologie structurale*, Plon, 荒川幾男ほか訳, 1972, 『構造人類学』 みすず書房.
- Marcel, Jean-Christophe, 2001, “Georges Gurvitch: les raisons d'un succès,” *Presses Universitaires de France*,” *Cahiers internationaux de sociologie*, vol. 110, janvier-juin 2001, pp. 97-119.
- McDonald, Pauline, 1979, “The Legal Sociology of Georges Gurvitch,” *British Journal of Law and Society*, Vol. 6, No. 1, 24-52.
- Noreau, Pierre and Andre-Jean Arnaud, 1998, “The Sociology of Law in France: Trends and Paradigms” *Journal of Law and Society*, Vol25, No.2, pp.258-283.
- Swedberg, Richard, 1982, *Sociology as Disenchantment: The Evolution of the Work of Georges Gurvitch*, Atlantic Highlands, NJ: Humanities Press.
- ◆邦文献
- アンサール, 2004, 『社会学の新生』 石井素子・白鳥義彦・都村聞人訳, 藤原書店.
- 石川晃司, 1994, 「動態社会学から政治人類学へ: G. バランディエの所説を中心に」『湘南工科大学紀要』 第28巻第1号、127-136頁.
- 伊東俊彦, 2011, 「ジョルジュ・ギュルヴィッチの社会学」『成城大学共通教育論集』 第3号、1-17頁.
- , 1993, 『ジョルジュ・ギュルヴィッチにおける社会学思想』 仲康編訳, 慶応通信.
- 宇津栄祐, 1965, 「社会学と修正主義 (下)」『社会学評論』 第15巻第4号、92-120頁.
- 小谷朋弘, 1977, 「ギュルヴィッチの法社会学的思考」『政経論叢』 第26巻第5号、271-288頁.
- , 1978, 「人間精神の社会学」としての法社会学—G・ギュルヴィッチの場合」『広島法学』 第2巻第1号、47-68頁.
- 嶋田義仁, 1993, 「歴史と政治の復権—ジョル

- ジュ・バランディエの政治人類学』『異次元交換の政治人類学—人類学的思考とはなにか』勁草書房.
- ジャン、D.、ギユルヴィッチ、G.、木下道夫、1969、「自管理におけるマルクス主義とブルードン主義—ギユルヴィッチの自管理論」『現代の理論』第6巻第10号、79-100頁.
- 野口隆、1955、「『全体的社会現象』概念の展開—モースからギユルヴィッチへ」『社会学評論』第6巻第2号、2-32頁.
- 、1961、『ギユルヴィッチ社会学の研究』関書院.
- バランディエ、1995、『意味と力—社会動学論』小関藤一郎訳、法政大学出版局.
- 飛沢謙一、1967、「ギユルヴィッチの哲学思想」『法と政治』第18巻第1号、1-41頁.
- 湯浅慎一、2006、『秘密結社フリーメイソンリー』太陽出版.
- リンガー、F.K.、1996、『知の歴史社会学—フランスとドイツにおける教養 1890~1920』名古屋大学出版会.